フランス書籍労連，パリ植字工組合における J. アルマーヌ

清　水　克　洋

目　　次

はじめに
第１節　1884-1886年　ユニオニストとの闘い
第２節　書籍労連中央委員会におけるアルマーヌとクーフェの覇権争い
第３節　Réveil 紙と J. アルマーヌ
おわりに

はじめに

革命的社会主義労働者党，通称アルマーヌ派を率いて，19世紀末フランスにおける労働運動，労働組合運動に大きな役割を果たした J. アルマーヌの活動の原点は，パリ植字工組合，フランス書籍労連にある。しかし，アルマーヌについての研究，言及の多くは，労働党内でのブルース派との対抗，アルマーヌ派の結成と革命的労働組合主義への影響にかかわるものである[1)]。また，書籍労連，植字工組合に関する研究においても，アルマーヌの活動の実態，とりわけ，A. クーフェとの指導権争いは未解明なままである。本稿は，流刑から戻って以降，1883年 le Cercle typographique

1）　拙稿「革命的社会主義労働者党指導者 J. アルマーヌについて―「フランス書籍労連における J. アルマーヌ」のための準備的考察―」『熊本学園大学経済論集』第27巻第1-4合併号2021年参照。

d'études sociales 結成，1884年 Réveil Typographique 発刊の中心となり，本格的にパリ植字工組合にかかわり，1884年末から1889年末まで書籍労連中央委員として積極的に活動しながら，A. クーフェとの指導権争いに敗れて退くまでを跡づけることによって，この課題に応えようとするものである。それは，革命的労働組合主義とのかかわりで言われる，アルマーヌの「反権威主義」,「労働者性」の検討による，アルマーヌ像の再構成につながるものでもある。さらに，アルマーヌの退場は，書籍労連における A. クーフェの指導権の最終的な確立であり，本稿をもって，これまでの我々の A. クーフェ研究をとりあえず締め括るものとしたい。

検討の素材，資料はこれまでと同様，書籍労連機関紙 Typographie Française，サークル派機関紙 Réveil typographique，ユニオニスト機関紙 Ralliement typographique である。本稿は，以下の時系列的考察によって構成される。A. クーフェとともに，ユニオニストとの闘いを繰り広げた1884-1886年，ユニオニストのパリ植字工組合からの離脱に伴い，クーフェとの指導権争いが顕在化した1886-1888年，ブーランジスムとの闘いに伴う Parti Ouvrier 紙の発刊，Proletariat 印刷所設立がもたらすアルマーヌの労働組合からの退場となる1888-1889年である。なお，最後の節では，Réveil 紙とアルマーヌの関係を改めて考察することになる。

第１節　1884-1886年　ユニオニストとの闘い

1839年に始まるパリ植字工組合が中心となって，1881年に設立されたフランス書籍労連は，パリ組合の古くからの幹部を中心に運営されてきた。ところが，1884年５月に，設立以来の唯一の有給常任書記 J. マンテルが組織運営，財産管理をめぐって解任される事件が生じた。アルマーヌの指導の下，前年に設立された社会研究植字工サークルは，５月25日に Réveil 紙を発刊して，書籍労連の運営，それを担った役員たちを厳しく批判し

た。これに対抗して，旧来の幹部を中心に翌1885年 5 月 1 日に Ralliement Typographique が発刊され，植字工組合，書籍労連内に明確な 2 分派が形成されて激しい対立，抗争が生ずる[2)]。1884年末の書籍労連中央委員会委員選挙において，11人中，J. アルマーヌを含む 5 人が選出されたサークル派は，労連指導部で影響力を強め，アルマーヌはこれ以降中央委員会委員として積極的に活動することになる。他方，パリ植字工組合は一時的にサークル派が組合委の多数を握るが，ユニオニストに奪回された。この間の経過，両派の対立の争点については，すでに前稿において検討した[3)]。本稿では1886年における両派の対立の激化，結局ユニオニストによるパリ組合分裂に至る経過，そこにおけるアルマーヌとクーフェの協調と対立を検討する。

J. アルマーヌは，1884年末に，書籍労連中央委員に選出されて以来，1885年を通じて，公用による場合を除いて，ほとんどの中央委員会に出席し，また，パリ植字工組合集会にも積極的に参加した。中央委代表としてストの指導のためブザンソンに派遣され，アルジェ労働大会出席を利用して周辺での組織活動を行い，パリ植字工組合から選出されてアントワープ国際大会に出席した。さらに， 9 月の書籍労連第 3 回大会では運営委員として活躍した。1886年から87年にかけても，87年の書籍労連第 4 回大会への積極参加等，同様の活動が続いた。ユニオニストとの闘争にかかわる活

2） Ralliement N. 17. 1886年 7 月 1 日付 F. Garcez の論説 Lutte! は，この経過を次のように述べている。「1884年 2 月13日に，炯眼のある幾人かが，サークルの革命主義的主張に抗することを決定したグループの結成を目指す回状をパリの植字工に配布した。 3 日後に L'Union typographique が設立され，400人の仲間が加入した」と。ユニオン派の形成はあくまでもサークル派への対抗からであったことを確認できる。

3） 拙稿「フランス書籍労連における A. クフェルの指導権掌握―マンテル事件とアルマヌ派，ユニオニストの内部対立―」『商学論纂』第60巻第 1・2 号 2018年 9 月参照。

動について取り上げる前に，書籍労連代表としての地方派遣から，アルマーヌの書籍労連中央委における位置を検討しておこう。表１に，この２年間の実績を掲げる。アルマーヌについて，1886年３月，ナントを含む西部地方，８月，ブルターニュ，９月，ランスを中心とする東部地方，1887年に入って，１月には，リール支部総会で反中央委員会決定がなされたことへの対応のためにリール派遣，５月，アルジェリア全域からマルセイユでの宣伝活動を確認できる。表１が示す通り，地方派遣は，ごく一部を除いて，アルマーヌと，A. クーフェに限られ，アルマーヌは，書籍労連中央委常任書記と並んで，文字通り書籍労連の顔としての役割を果たしていたのである[4),5)]。ただし，アルマーヌの場合，西部地方派遣を除くと，フランス労働党の活動と並行したものであり，ここからはどちらの活動に重点が置かれていたのかを判断できない。また，これが，ユニオニストによる，書籍労連の旅費を利用して，労働党の活動をしているとの非難を呼ぶ

表１　書籍労連中央委代表派遣

	A. クーフェ	J. アルマーヌ	その他
1886年	２月　アラス ５月　ブロワ, ボルドー	３月　西部地方 ８月　ブルターニュ ９月　東部地方	ジオベ　ロンドン大会
1887年	１月　アブヴィル ８月　製紙工組合総会 10月　リヨン	１月　リール ５月　アルジェリア 10月　（労働党大会）	リコム　クレルモン・フェラン ジオベ　ヴァランシエンヌ

注）書籍労連機関紙 N. 106., N. 109., N. 120., N. 121., N. 125., N. 127., N. 128., N. 137., N. 143., N. 145., N. 146. より。

4）アランソンの植字学校に関して公的扶助の代表との交渉に２人で臨むこともあった。書籍労連機関紙（以下 T.F. と略記）N. 115.

5）ただし，書籍労連機関紙における論説について見ると，クーフェのものが頻繁に掲載されているのに対して，アルマーヌのそれはごく少ない。

ことにもつながった。

ところで，これらの地方派遣については，労連中央委で報告がなされ，より詳細な報告書が機関紙に掲載された。それらは，アルマーヌの人となり，活動家としての資質を示すものとして貴重である。とりわけ，1886年の西部地方派遣報告からは，通常，コミュナールとしての圧倒的な評判，また，講演における即興性，熱弁が指摘されるのに対して，極めて慎重な組織活動を行う姿が見て取れる。簡単に紹介しておこう。この派遣は，ブレストを中心とする書籍労連の活動に限定されたものであった。3月18日夜にパリを発ち，21日にブレスト，23日にサン・ブリュー集会・講演。これらは，比較的容易であった。24日にはラヴァルで，到着予定を知らせる電報が未着というアクシデントにもめげず，労連代表の資格を隠しながら，2つの主要印刷所を訪問し，現地の仲間と共に将来のために「組合の芽を形成する準備」を行った。「ラヴァルの状況につらい思いをしながらも」，同日，ナントに着いた。そこでは，「勘違いに基づく不安によって，書籍労連からの離脱が生じており」，これと，「敵対」を克服しなければならなかった。支部集会において，「任務は困難であったが，成功を確信し」，粘り強く訴えを続け，「53：26で書籍労連復帰の決定」を勝ち取った。ナントの例に倣って分離主義者が策動していたアンジェルへの訪問も成功した。パリへの帰りに，サン・クルーで集会を持ち組織化を試みる予定であったが，疲れと，失声症のため延期したとされるほど，この西部派遣は激務であった[6)]。9月の東部地方派遣報告も精力的な講演，組織活動を示している[7)]。アルマーヌの組合活動家としての資質の高さを確認できる。

すでに検討してきたように，1884年のマンテル事件が引き起こした，旧組合幹部に対する一般組合員の不満，不信は，アルマーヌ率いるサークル

6） Cf. T.F. N. 109.

7） Cf. T.F. N. 124.

派の伸長，旧幹部ユニオニストとの対立となった。後者は，なお，書籍労連傘下の最大組合であるパリ支部（パリ植字工組合）委員会を掌握し，とりわけ，コントロール委員会を拠点に，サークル派の影響力が強まった書籍労連中央委との対決姿勢を強めた。この対立は，1886年に入って一層激しくなり，最終的には，サークル派がパリ植字工組合，相互扶助組合における指導権を掌握し，ユニオニストが別組合を結成してパリ組合の分裂に至る。この経過と，そこでのアルマーヌの役割を検討しよう。書籍労連機関紙から，この間の主要事件を表２に整理しておく。

表２　書籍労連に関する1886，1887年の主な出来事

1886年	
１月	ユニオニスト　パリ植字工組合　委員会選挙勝利 サークル派15名中１名ラバリエル
３月	パリ植字工組合と校正工組合の間の紛争
５月	パリ Mouillot 商会でのストライキ
７月	パリ植字工組合員の労連加盟を任意とする投票 サークル派　パリ植字工組合　委員会選挙勝利
８月	パリ Mouillot 商会でのストライキ収束，敗北
９月	l'Officiel の植字工の組合脱退，新組合結成
11月	サークル派幹部パルロの死亡　葬儀 パリ分離組合結成
12月	パリ相互扶助組合臨時総会
1887年	
１月	パリ支部　組合委選挙　全てサークル派の候補が当選
３月	パリ相互扶助組合委員選挙　ユニオニスト敗北
７月	パリ支部　組合委選挙　サークルの候補者14/15が当選 パリ相互扶助組合代表選挙　Mangeot（中間派）当選
９月	書籍労連第４回大会 第４回大会地方代表による，パリ支部の２グループに対する和解の働きかけ

サークル派とユニオニストの対立が決定的になったのは，５月末に始まり，８月まで続いたパリの１商会でのストライキをめぐってである。しかし，年初からその前哨戦ともいうべきものが繰り広げられていた。校正工組合とパリ植字工組合の間の紛争である。３月20日の労連中央委において，校正工組合選出の中央委員セリエが以下の問題を提起した。すなわち，パリ植字工組合と３年前に結成された校正工組合との間に，植字工組合員が，校正工の仕事をする場合，後者の組合に入るとの協定が結ばれた。ところが，最近，ユニオニストが多数派を奪い返したパリ植字工組合において，規約が改正され，上記の場合，校正工の仕事をする植字工は，植字工組合に残り，校正工組合に入らなくともよいとした。校正工組合は，これが特定の地域で，特定の仕事をする組合員は，その職業の組合に入らねばならないとの労連規約に反するので，パリ組合に新規約の廃棄を求めると[8)]。

これに対して，パリ植字工組合は，次のコントロール委員会決定に見られるように真っ向から対決した。「44人の校正工組合員は――校正工は数百人もいる――，新規約によって廃止された数年来の協定の名で，一時的に植字をやめ，校正の仕事をする場合，植字工にこの44人の組合に入ることを強制しようとした」と[9)]。さらに，パリ植字工組合は支部の自立性を盾にとって，労連中央委の事情聴取のための招集にも応じず，問題は，校正工と植字工組合の対立を超えて，書籍労連中央委と，パリ植字工組合の対立に発展したのである。パリ植字工組合によれば，校正工組合は，ごく少数の組合員しか擁していない，取るに足らない組合であるにもかかわらず，書籍労連は，中央委に２名，事務局に１名の委員を受け入れている。したがって，このような中央委の指示に従う必要性を認めず，むしろ，校

8） Cf. T.F. N. 108.

9） Cf. Ralliement.（以下 Ra. と略記）N. 15.

正工を含む関連工組合の労連への代表権の剝奪，さらには中央委の廃止までをも求めると[10), 11)]。

これに対して，労連中央委員会は，４月中に３度の委員会を開催して対応を検討し，最終的に，４月24日の臨時中央委で，セリエ提案，「パリ植字工組合は，労連規約に合致するよう組合規約第12条を改正する」を採択した。しかし，それは，17対10と中央委を２分するものであり，アルマーヌ，パルロを含むサークル派が，校正工組合セリエを積極的に支持した結果である。これに対して，少数派となった，労連常任書記クーフェは，一貫して慎重論を貫いていた。その論拠は，労連規約がこのような事態に対応しておらず，検討の余地はあること，ただし，問題は以前から存在していたのであり，まだ，言われている利益が損なわれているわけではなく，事態の深刻化に驚く，というものであった[12)]。クーフェが，パリ支部との間に，なお，和解の可能性を見ていたのに対して，アルマーヌは，対立を煽る意図を持っていたかどうかは別としても，激化してもやむをえずと

10） Cf. Ra. N. 16. ユニオニストの中心人物ルグランによる，ルーアン支部代表グルネ氏あての手紙。「関連工組合は，１，２の例外を除いて，その職業を代表していない。彼らは取るに足らない少数である」。「パリ植字工組合は労連の組合員（2,213人３月）の1/3を代表しているが，２票しか持たない。約300人の関連工組合諸支部は５票を持つ。組合員数に応じた投票権を要求する」。

11） フランス書籍労連内のパリ植字工組合と，校正工組合を含む関連工組合との関係，1885年の書籍労連第３回大会における，ユニオニストによる，中央委のパリ以外の都市への移転提案，中央委不要論の展開については，拙稿「フランス書籍労連における A. クフェルの指導権掌握」『商学論纂』第60巻第１・２号参照。

12） Réveil.（以下 Re. と略記）N. 54. ５月１日付には，「規約12条を廃止しなくとも協定を維持するのは容易」とする，労連中央委のクーフェと，デクルワ連名の手紙にもかかわらず，パリ組合コントロール委は道理を聞かず，２人の努力が無駄になったとの記事が掲載される。

し，これをきっかけに組合指導部を奪い返そうとしていたと言ってよい。

後になってではあるが，ユニオニストは，サークル派がセリエをそそのかして利用したとしている[13)]。それだけではない，サークル派の中にも別な認識があった。重要な手掛かりを与えるのは，サークル派の機関紙 Réveil に掲載された V. ブルトンの以下の論説である。まず，校正工の実態が次のように言われる。「現在，かわるがわる校正工であったり，植字工であったりしている。小さなところでは試し刷りを読むのは植字工である。地方では多くそうであり，特別な校正工を雇うことはできない。……パリでも組合結成にかかわろうとする校正工は少数であり，彼らは，元教師，元弁護士，科学者，事務員，バカロレア浪人等，不均質である。組合員的感覚を持たず，「職」への帰属意識が欠如している」と。そして，2つの組合は何の役にも立たず，「私には校正工組合があったことが間違いであったと思われる」として，「両組合の合同を提唱」する[14)]。これは，ユニオニストの機関紙 Ralliement における次のような記事と照応していた。「校正工には，失業中の教師，舎監など」いろいろな人が入っている。他方，「教養のある植字工は，いつも最良の校正工である」。「私は植字工ではあるが，校正工，鋳造工，になり，すべての関連工組合に入ることができる」と[15)]。もちろん，ブルトンがサークル派内で占めていた位置につ

13） Cf. Ra. N. 29. La pharange alerté. L.B. Marchenaud.「ピエロンにそそのかされたセリエが発見され，長く存在していた中央委とパリ支部の争いが極端になった」。

14） Cf. Re. N. 53.

15） さきに見たルグランも同じ手紙で次のように言う「校正工組合とパリ植字工組合の争いは，中央委の頑固な多数派にあおられてより大きくなった」と。CF. Ra. N. 16. また，Ralliement 紙 N. 29. 6 月 1 日付の 1 論説では，「残っている幾人かのメンバー――クーフェがその一人――の見解にもかかわらず，中央委は組合に規約改正を命ずる」。として，労連中央委内での対立を指摘する。

いては検討の必要があるとしても，Réveil 紙に多くの論説を書いていた J.H. もまた，「中央委に対して，パリ支部の新しい規約についての十分な検討の時間を与えなかった校正工の忍耐力なさが事件を加速した」と指摘している。このようなサークル派内での異論，慎重論を知りながら，しかも，書籍労連中央委を二分してまでも，アルマーヌが校正工組合を支持した事実は見落とせない[16)]。

書籍労連中央委とパリ植字工組合の対立が頂点に達するとともに，上記事件と同様，労連中央委内部の見解の相違が現れるパリの１商会でのストライキについて検討しよう。経過は次の通りである。まず，５月25日に，パリの Mouillot 商会のパリ近郊 Issy 印刷所で，植字工に対して賃金切り下げが通告された。パリ植字工組合委員会は，この報告を受け，必要ならストライキを打つことを決定し，翌日から実行された。次の日，同商会のパリ印刷所が連帯ストに入った。これをもとに，パリ植字工組合は，書籍労連中央委にストの承認，スト手当の支給を求めた。これに対して，労連中央委は，近郊 Issy 印刷所では，賃金切り下げ，少なくとも，その脅威があり，ストライキは規約にかなっているが，パリ印刷所の連帯ストは，事前に中央委に諮られる必要があり，正式には認められず，募金によって支援するとした[17)]。パリ植字工組合委は，書籍労連に対するスト支援要求と，介入拒否の間で動揺を繰り返し，ストライキの収拾もできなくなっ

16） この問題は，当時のフランスにおける労働組合の在り方について重要な示唆を与えるものとして見落とせない。フランス書籍労連は，関連工の独自の組合形成を奨励し，参加組合に中央委を割り当て，当初の植字工，および関連工連盟から，書籍労働者連盟になった。しかし，校正工と植字工は画然と区別された職種ではなく，上の事例からも明らかなように，植字工は自由に校正の仕事をした。職としての植字工の優位が存在したのであり，組合もこの原理の上に成り立っていたのである。

17） Cf. T.F. N. 113.

た[18]。最終的には，書籍労連中央委が召集するパリ組合員の臨時総会でストライキが収拾され，「200人がポストを失い，1878年と比較しうるほどの損失を被る」ことになった[19]。また，このストライキ支援のために全国の組合に課せられた臨時組合費負担は，労連傘下の多くの支部を消失させることにもなった[20]。この間，パリ組合委はストライキを指導できなくなっただけでなく，パリ組合員の労連加盟を任意とする提案を組合員投票にかけて否決され，事実上の不信任状態に追い込まれ，７月の組合委員会選挙で，サークル派に完敗した[21]。

この経過を見る限り，パリ組合委員会の無能さ，組合指導の杜撰さが目立ち，それが組合委選挙での敗北をもたらしたことは否定しえない。しかし，この事件の全貌と，そこでのアルマーヌの役割を解明するうえでは，いま少し検討が必要である。まず，確認されねばならないのは，この Mouillot 商会がサークル派の拠点であったことである。労連機関紙６月16日付，「パリ組合は，首都で最良のものの１つである商会を失った」[22]。同９月１日付，「200人がポストを失う」[23]。２つの分派の機関紙はより明瞭である。サークル派。Réveil ７月10日付，「Mouillot 商会は commandite の

18） 書籍労連によるスト承認，支援を求めて，５月27日臨時中央委に出席したブロワンは，「救済の相互性を受け入れるが支配されたくない」として，組合委の議論に中央委委員が参加することを拒否した。それでは，支援を与えられないとされ，一時中座して，組合委に諮った後，「中央委との一致を受け入れ，支援を要請する」とした。Cf. T.F. N. 113.

19） Cf. T.F. N. 118.

20） Cf. T.F. N. 119.

21） 投票結果は以下の通りであった。総数1,675 non 917 oui 666 白票 92。T.F.N. 116. ８月１日付参照。「パリの仲間は労連精神を示した」と歓迎されており，パリ組合コントロール委の提案の無謀さが明らかではあるが，賛成票も少なくなく，ユニオニストに対する根強い支持層がいたことも示される。

22） T.F. N. 113.

23） T.F. N. 118.

考えの強固な場。これを倒すためにスト指令がなされた」[24)]。ユニオニスト。Ralliement 紙10月 1 日付，「皆が知っているように，ヴォルテール河岸の印刷所は，サークルの影響力が強い地区にあり，そのメンバーの多くがそこにいる。この多数は，組合の代表を任命し，Issy 印刷所に連帯を宣言する指令を与えたストライキの投票に加わった。投票は何の疑いも残すものではなかったので，譲歩せざるをえなかった」[25)]。

Ralliement 紙10月 1 日付の「何故，サークル員はこの商会を失うリスクを犯したのか。彼らの地区，全くの自由，彼ら自身が雇用，宝の国とうたっている商会を」との指摘はそれなりに説得力を持つ[26)]。また，サークル派の幹部とみなすべき，Réveil 紙の編集責任者ラバリエルがパリ植字工組合委に席を占め，ストライキに賛成したことも見落とせない。彼は，スト収拾のための 8 月29日総会において，以下の苦しい発言をしている。「Issy のストを承認し，次いでパリ Monteur 印刷所のスト投票に引きずり込まれた。中央委と支部委の分裂の際に辞任しなかったことを悔やむ」と[27)]。ユニオニストは，一連の事態がサークル派の陰謀であったとの主張を続け，事実経過をめぐっても，やり取りが続いた。ここで，その当否を検討

24） Re. N. 58. さらに，Réveil. 12月15日付「Mouillot ストによってユニオン派の組版工を困らせる la commandites de labeur がつぶされた」Re. N. 69.

25） 5 月26日夜の連帯スト投票に関して，「連帯に賛成した人の中に，D.（現議長），E., G., A. など，すべて戦闘的サークル員を見出す」。「これらの代表の投票が，たからかに連帯を主張。支部委は本質的には和解的感情にもかかわらず，パリのストライキを決定する辛い必要性に迫られた」。Cf. Ra. N. 20.

26） Cf. Ra. N. 20. さらに，Ralliement 紙 11月 1 日 N. 21. ユニオニスト幹部ビウール。「労連規約では，中央委は Mouillot 商会のストライキを認めない権利を持っていた。パリのストライキを認めないと宣言をする義務があったのでは？　そうすれば，パリ組合委は，組合員を商会に戻すことを強制されたはず。にもかかわらず，すべての責任はパリ組合委に負わされた」。

27） Cf., Re. N. 62., T.F. N. 119.

することはできないが，アルマーヌがこのストライキ事件にどのように対処したかを検討するうえでは確認しておくべきことである。

労連中央委において，アルマーヌは，パリ組合指導部との強い対決姿勢を取り続け，パリ組合との対立をできるだけ抑えようと慎重論を堅持するクーフェと対立した。6月5日の中央委において，「近郊印刷所のストライキのみを認め，パリ印刷所については支部負担とする」とのセリエ提案を支持した。それは，サークル派幹部ナンバー2のパルロなどとも対立してであり，16対3で否決されたことは注目すべきである[28)]。また，ストライキ委員会が，当初は中央委の2名の参加を認めていたのに，パリ組合コントロール委によって1名に減らすとされた際に，クーフェは，1名でも派遣すべきとしたのに対し，強く受け入れられないとして，これを採択させた[29)]。さらに，6月7日の臨時中央委において，クーフェが一部だけでも職場復帰という収拾案を提案したが，アルマーヌらの反対でストが継続された。したがって，アルマーヌは，校正工組合問題と同様，パリ支部との対立の深まりを，全く恐れていなかった。むしろ，それを通じた，サークル派によるパリ組合指導部掌握が，アルマーヌの意図であった可能性も否定しえない。

最終的なパリ組合の分裂は，公的な新聞 Journal Officiel の印刷を政府の委託で請け負っていた労働者生産組合（株式会社経営）にかかわる問題

28） Cf. T.F. N. 113. パリスト支援は保留するとのパルロ案が16：3で可決された。

29） Cf. T.F. N. 113. 6月3日臨時中央委において，反対1，棄権1を除いて，「1人を送らないこと」が採択された。クーフェは6月12日の臨時中央委において，次のように述べてその主張を正当化している。「私だけが，1代表をスト委に送ることに賛成した。アルマーヌの現在の提案は，様々な出来事とともにその正しさを示している。中央委決定は2つの委員会の行動を麻痺させた」と。Cf. T.F. N. 114.

から生じた。この生産組合は，1880年設立当初，労働組合が合法化されておらず，法人格を持ちえなかったために，パリ組合の金銭的支援の下，22人の組合員に株式会社結成を認めたことが出発点であった[30)]。パリ組合委を掌握したサークル派が，「労働と利益をこの印刷所のすべての労働者の間で平等に分配」しようとしたことから，株主である労働者と対立し，後者が組合を離脱し，新組合 Alliance typographique を結成した[31)]。さらに，ユニオニストが掌握する相互扶助組合に対しても，サークル派が，労働組合と相互扶助組合の分離を主張して攻勢をかけ，管理委員会選挙に勝利した[32)]ことから，ユニオニストが全体としてパリ組合を脱退し，上記 Alliance と合流して新組合を結成したのである[33)]。労連機関紙，1887年１月１日付においては，パリ支部[34)]の報告として「パリでの分離騒動について，200人がパリ組合を出たが，2000人はパリ組合に忠誠」[35)]とする。しかし，次号では，１月９日パリ支部総会において，組合退会者405名を

30） T.F. N. 121. 10月16日付 La question de l'Officiel. 参照。「最初はうまくゆく。委員会が作業場の労働を公正な仕方で規制しようとした時に，株主は抵抗し，組合の後見から逃れようとする。組合は，労働と利益をこの印刷所のすべての労働者の間で平等に分けようとし，株主は，利益の最大限を独占しようとする」。

31） Cf. T.F. N. 121., T.F. N. 122., T.F. N. 132., Ra. N. 21., N. 22. Re. N. 67.

32） 12月19日に，パリ相互扶助組合の臨時総会が開催され，議長アラリー，ビウール（ユニオニスト）らと，サークル主義者の対立で混乱し，アラリー退席後にマンジェオ議長の下で続行した。アルマーヌがこの流れを主導した。Cf. T.F. N.126. その後，1887年３月に，相互扶助組合委員選挙が行われ，サークル派が勝利した。Cf. T.F. N. 132. 12月19日総会についてのユニオニストの見解については，Cf. Ra. N. 24. サークル派については，Cf. Re. N. 69.

33） ユニオニスト側からの，分裂の要因には，コントロール委員会の廃止を含むパリ組合の規約改正もあった。Cf. Ra. N. 21., N. 22.

34） サークル派がパリ植字工組合の指導権を掌握して以降，書籍労連パリ支部としての性格が強まったことから，以下，パリ支部と表示する。

35） T.F. N. 126.

確認している[36]。サークル派の楽観にもかかわらず，分裂は大規模になり，パリ組合，書籍労連全体に大きな打撃となった。

この一連の流れには，ユニオニストに対するサークル派の強い対決姿勢が見られ，そこに，アルマーヌの明示的，あるいは，言外の指導があったことは否定しえない。それはまた，パリ組合との対立を，和らげ，あくまでも分裂を避けようとしたクーフェの抵抗を押し切ってなされたのである[37]。

第 2 節　書籍労連中央委員会におけるアルマーヌとクーフェの覇権争い

前節での検討は，1886年において，アルマーヌとクーフェは対立しながらも協力してユニオニストと闘ったことを示している。しかし，1888年 1 月の書籍労連中央委代表選挙，および，代表の任期をめぐる議論において，この対立が頂点を迎え，1888年末にアルマーヌの退場となる。とはいえ，アルマーヌとクーフェの直接的対立の場面は，3 つの機関紙において，それほど頻繁に見出されるわけではない。また，アルマーヌが，最終的に書籍労連，パリ植字工組合を離れるのは，むしろ，サークル派内での対立からであった。この問題については，次節で検討することとし，本節では，アルマーヌが率いるサークル派とクーフェ，ないし彼を代表とする独立派との争いについて検討する。その際，次の点に留意されねばならない。まず，サークル派については，すでに見てきたように，パリを中心

36）　Cf. T.F. N. 127.

37）　6 月26日臨時中央委における，次の経過も，クーフェの姿勢をよく示す。パリ組合の回状を機関誌に掲載する要求に関して，「機関紙が中央委のもので，労連のものではないと思われるので掲載すべき」と。これは多くの委員の反対にあい，掲載拒否が採択された。Cf. T.F. N. 115.

に，フランスの植字工の中に，フランス労働党の下部組織としてサークルが存在し，所属メンバーも推定することができる。また，内実はおくとしても，アルマーヌの指導性はだれの目にも明らかであり，サークル員によるクーフェ批判は，ほぼ，アルマーヌによるそれと同一視することができる。これに対して，公式には独立派という組織はなく，したがって，クーフェとの関係も明確ではない。クーフェがアルマーヌ，サークル派と対抗するにあたり，全く個人的に行動し，また，偶然に依拠していたとは考えられず，何らかの組織活動があったはずであるがその実態は不明である[38)]。この点の検討は，対立そのものの解明の準備作業であるだけでなく，両者の対立の重要な一面を明らかにするものでもある。

独立派が正式な組織ではなく，基本的に他称であり，Typographie Française で取り上げられないのは，書籍労連の公式機関紙という性格上当然である[39)]。2つの分派の機関紙について見ると，独立派についての言及は，サークル派の Réveil 紙では，1889年末の労連中央委員の選挙にかかわる一連のものを除くと，1886年末の2つのみである。まず，11月10日付 N. 66., E.V. による 論説 L'Accord. での10月30日パリ支部臨時総会における規約の議論にかかわる以下の叙述。独立派が，「我々は独立している(indépendants)。どのようなグループにも従属しておらず，我々が望んだので分離は終わった」と言うと。そして，「婉曲表現，デュガやクーフェによって展開される演説の巧緻さにもかかわらず，66条についての議論の

38) なお，クーフェが所属していたプロレタリア・ポジティヴィスト・サークルは，極めて狭い組織であり，植字工の独立派に属する人々とは無関係と考える。拙稿「オギュスト・クフェルとプロレタリア・ポジティヴィスム」『商学論纂』第57巻第3・4号2016年参照。

39) 唯一，独立派への言及とも言えなくはないのは，後に取り上げる，2月16日付 T.F. N. 105. における1月16日中央委での1委員リコムによる発言である。

中で，以下の原理は守られた。すなわち総会が最高決定機関であると認められた」と。E.V. は Réveil 紙の経営面での責任者で，後に，アルマーヌとともに印刷所を設立することになる E. ヴィユイであることからすると，これはサークル派全体の認識としてよい。独立派の存在が確認され，クーフェ以外にも，デュガの名前が挙げられていることは注目される。いま 1 つは，12月10日付 N. 68. 地方の 1 同志からの手紙への回答で，「この通信者は，次の選挙が戦いの場ということを知らない。3 つのリストが言われている。サークル（現委員会），ユニオン，独立派。独立派がユニオンを利するなら在方がないが，そうはならないであろう」と。ここでも，独立派の存在が確認されている。これ以降，1889年末まで，独立派への言及がないのは，サークル派が，批判の対象としてクーフェ個人は重視しながらも，組織としての独立派を軽視していたことによるものであろう。

多くの言及が見られる，ユニオニストの機関紙 Ralliement を検討しよう[40]。1886年 9 月 1 日付 N. 19. に，「独立派とすべてのパリ組合員への訴え」との興味深い記事が見られる。「我々は，独立派（indépendants）を宣言する人々に訴える。その幾人かは，パリ組合委と中央委に席を占める。我々は，我々が戦う相手と，彼らを混同しない。正当性が侵されたのであるから我々を助けてほしい。……すべての社会秩序の敵であり，我々を分裂させようとしているセクトの少数派の策動に抗するために我々と協力してほしい」と。いつ，どこでの事実かは確認できないが，「独立派を宣言する人々」と明瞭な表現には，7 月のパリ組合員会選挙で敗北を喫した直後のユニオニストの心情が鮮明である[41]。しかし，彼らの期待は失望に変

40） Ralliement 紙では，すでに1885年に N. 3. において，「独立派」と題する論説を掲げている。この点については，拙稿 前掲「フランス書籍労連における A. クフェルの指導権掌握」参照。

41） 署名はないが，内容からして，ユニオニストの公式の見解と考えられる。

わる。パリ組合の規約改正にかかわる，11月，12月のN. 21. N. 22. の A travers Règlements et Assemblées. とする連続論説では，独立派が，総会と組合員投票に関する，わずかな，些細なサークル派の譲歩に満足したとし，「偽独立主義者（pseudo-indépendants）」と罵っている[42]。すでに分離派組合が結成され，ユニオニストが独立派との提携に見切りをつけたのである。それはともかく，似非独立派として，ベルナール，デュガそしてクーフェの名が挙げられ，特定の人間集団が想定されていることが見逃せない。1887年には，書籍労連全国大会批判とかかわって，同様の認識が表明されている[43]。ただし，続くN. 35. での，「１人の独立派ル・ジュンヌはサークル主義者ベルナールに置き換えられた」との指摘は，ベルナールを独立派としたさきのものと矛盾しており，独立派の組織としての不定形さが示されると言える[44]。

1888年，89年においても，提携を期待しつつ，それが実現されないことに失望するという，ユニオニストの独立派に対する言及の基本的構造は変わらない。1887年末の中央委選挙に関する論評では，独立派への不信感を表明する[45), 46]。また，７月１日付N. 43. では，「独立派を自称する人々の

42） 署名はイニシャルY. で，筆者の特定はできない。組合規約を離れ，「女性や徒弟を組合に入れることを主張する，アナーキストの労働者党への追従者であるのか」と，一般的な方針にも言及される。

43） 1887年10月の書籍労連全国大会についての特集号N. 33. numéro exceptionnel において，クーフェが労働組合法をめぐって，アルマーヌを批判しているが，「このような人に服従している時，独立派（indépendants）というのは不可能。独立派は獲得した地位を守ることに懸命。指導者の目的を隠すのに役立っているだけ」と。

44） Re. N. 43. も，ベルナール（H.）を，サークル派の候補としている。

45） Cf. Re. N. 38. 地方選出中央委選挙。「前号で，独立派を自称する党派が，パリでの闘争をほとんど放棄して，地方で反撃しようとしていると言った」。「卑劣なパリサークル主義者よりもましな自称独立派が多数を占める」。「党派（parti）」との表現は初めてである。

長であるクーフェは，隠れたサークル主義者でしかない。独立派が和解に到達したいというなら，我々の組合本部に来るべき」と。1889年 3 月20日付 N. 51. では，「我々の代表はパトロン代表と話し合い，混合委員会を提案。独立派がこれを評価し，我々との融合に向かうことを期待する」と[47]。

5 月 1 日付，N. 41. パリ支部主催の集会についての論評は，Ralliement における独立派に関する記述で最も重要なものである。すなわち，まず，「200人ほどが，いわゆる独立派のグロッセ，ボリー，クーフェ，メレージュ等の愚論を聴く。彼らは rue de Bailleul（分離派組合）の組合員との合意が必要であると示そうとする」。なお「愚論」とはしながらも，独立派が，ユニオニスト分離派との提携に傾いていることを評価している。それとともに，さきに挙げたデュガやル・ジュンヌに加え，クーフェ以外に独立派の指導者層とも言える 3 名のメンバーを指摘することが注目される。さらに，その 1 人，「ボリーによると，la rue de Savoie の組合（パリ支部）には，500人の独立派と，500人の無関心層と，200人のサークル主義者がいる。したがって事実上 3 つの組合がある」との紹介は，独立派自身によるパリ組合における力関係についての認識を示すものである。これまで，「独立派」を他称であるとしてきた。ユニオニストの叙述には，独立派の

46） アルマーヌ，サークル派についての次の叙述も見落とせない。「指導者（アルマーヌ）は欠席。市議会か下院の立候補に熱。代わりに副官ラバリエルが演壇を占拠。何もかもぶち壊し。サークルが場の主人であり，自称独立派（indépentants）の弱さのおかげでそれを続ける見込み」。

47） 11月 5 日 N. 47. も同趣旨。「独立派は，我々が総会を制限していると抗議し，年 4 回を義務付けた。コントロール委廃止の共犯者になった。独立派は満足し，丸裸にされるがままになっているのか」と。また，1889年 1 月 5 日付 N. 49.「すでに述べたように中央委には容赦なく戦いあう 2 つのグループがある」と。

「宣言」,「自称」などが見られたが，なお，根拠が示されたものではなかった。ここでは，独立派の１人が，公然と自らを名乗り，その存在を誇示している。パリ組合の再統合問題と関わり，曖昧であった独立派の輪郭が明瞭になりつつあると言える[48)]。

サークル派と独立派，アルマーヌとクーフェは，具体的な問題で見解を異にし，ぶつかることもあったが，それは，上記 Ralliement 紙の検討からも推察されるように，ユニオニストの期待に反して，決定的なものとはならなかった[49)]。その対立，抗争は，結局は，書籍労連中央委選挙，中央委代表選挙と，代表任期をめぐる議論に集約されることになる。労連中央委選挙と中央委役員選挙結果を表３，表４に掲げ，それに基づいて考察を

表３　書籍労連中央委員会委員選挙結果

1885年末パリ植字工組合選出
Alary 752票　Allemane 717票　Keufer 698票　Giobbé 675票　以下省略（T.F. N. 100.）
サークル派が11人中９人を占める。（Re. N. 43.）
1887年末パリ植字工組合選出
Keufer 687票　Giobbé 657票　Allemane 651票　以下省略（T.F. N. 148.）
サークル派　9/11
1889年末全支部投票（T.F. N. 198.）
中央委選挙結果　独立派21人　サークル派４人
辞任するか，留まるかの議論。留まる。（Re. N. 142.）

48）　ただし，この時点でもまだ,「選挙でなぜ無関心層と手を組んでサークル主義者を落とさないのか。何故，自分の考えを実行に移さないのか」との批判が主となっている。Cf. Ra. N. 41.

49）　この時期に対立した問題としては，クーフェが派遣されたロンドン国際大会，機関紙，一般に組合活動と政治活動の関係，労働党への代表派遣の可否などがあった。また，サークル派によるクーフェ攻撃の最大のものは，J. フェリーに関するポジティヴィストの見解表明批判があったが，これも，筆者 E. ヴィユイの期待に反して不発に終わった。Cf. Re. N. 94.

表 4　書籍労連中央委員会代表選挙

1886年　1月 7 日中央委	Keufer 27票（28票中）
1886年　7月 3 日中央委	（無投票？）[注1]
1887年　2月16日中央委	Keufer 14票　白票 2
1887年　7月 2 日	Keufer 15票　Giobbé 1 票
1888年　1月 7 日中央委	Keufer 18票　Paillot 11票[注2]
1889年　初め	Keufer 13票　Paillot 3 票　白票 4 [注3]

注1）1886年 7 月16日付 T.F. N. 115. が，7 月 3 日の中央委に関して，事務局構成として「Keufer 代表書記 Henschel 財政 A. Lefevre 会計 新聞 Giobbé」を挙げるのみである。
2）1888年 2 月 1 日付 T.F. N. 152.。
3）1889年 2 月 1 日付（T.F. N. 176.）秘密投票。

加えよう。

この間，書籍労連中央委員会員選挙は，1885年末，1887年末，1888年末の 3 回，また，中央委員会内での代表選挙は，1886年 1 回，1887年 2 回，1888年 1 回，1889年 1 回である。まず，1885年末中央委選挙とそれに基づく，1886年 1 月代表選挙を検討しよう。この中央委選挙は，それまでパリ植字工組合11名，関連工組合 8 名，計19名をあらため，地方選出15名を加えて計34名とするものであった。パリ植字工組合選出委員は，サークル派候補が11名中 9 名を占めた[50]。地方選出委員については，Réveil, Ralliement ともに言及がなく，1 月16日中央委での 1 委員リコムによる次の発言が唯一の手掛かりである。すなわち，「最近の投票が中央委に送り込んだ，全てのグループから独立した人の数は，地方が，代表は専ら労連の利害のみに従うことを要求していることを示す」と[51]。正確な数は不明ながら，労連中央委における勢力関係が示唆される。

代表選考の経過は次の通りである。まず，1886年 1 月 7 日中央委で，セ

50）Cf. T.F. N. 100., Re. N. 43.
51）Cf. T.F. N. 105.

リエが「１人の人間が１つの役を継続することの危険性」を根拠に，代表の任期を６か月とする提案を行った。クーフェは，「仕事に慣れたときに解任されることになり，イニシャティブの破壊につながる。マンテル事件は任期の問題ではなくコントロールの欠如によるもの」と反対を表明した。これに対して，サークル派のパルロ，エンシェルが，「任務を果たしていれば再選される」として６か月案を支持し，結局，20：８で採択された。地方選出委員の委員会出席が困難であったことを考慮しても，サークル派の影響力の強さが明らかである。ただし，代表については，これも，サークル派の中央委であるジオベが，「任務を果たしたとして，クーフェの継続を提案」し，28票中27票，白票１で，引き続きクーフェが代表となった。これに関して，Réveil 紙も，Ralliement 紙も全く論評していない。６か月後の代表改選については，労連機関紙にも記載が見られず，これは，パリの大ストライキ争動の最中で，代表選どころではなかったことによると考えられる。しかし，1887年の２回の代表選挙については，労連機関紙によれば，表４の通りであり，ほとんど無投票に近い状態でクーフェが選出されていて，これについても経過は不明である。とりあえず，この間の代表選挙において，大きな影響力を持ちながらもサークル派が候補を立てなかった事実を確認しておく。

サークル派が代表選で唯一対立候補を立てたと言ってよいのは，1887年末の中央委選挙の結果を踏まえた1888年１月７日の中央委においてであった。財政担当として，中間派のコルドヴァが26票，白票１で選出された後，代表選挙に関して，若干の議論があった。「多くの委員を代表して」，サークル派のフロニーが，「クーフェを評価しながら，民主主義の観点から交代を要求」した。クーフェは，「今こそ経験が必要であり，障害になるなら言われなくとも辞める」と，強く反論し，２人の委員も反対を表明した。最終的にアルマーヌがフロニーに賛成しパイヨを推薦した。結果は

表 4 に示す通りクーフェ18票に対してパイヨ11票と，サークル派の敗北となった[52]。続く 1 月21日中央委員会において，6 か月ごとの役職の交代について激しい議論が交わされた。代表選に関してクーフェ支持を表明したデクルワによる，「6 か月では短すぎるので 2 年を提案する」との発言が発端であった。これに対して，アルマーヌが直ちに反論した。「(提案には) 代表の特権を見る。すべての役員は同格でなくてはならない。現代表に何の問題もないが，過去の問題は 6 か月ごとの改選があれば防げた」と。クーフェは，「代表職が成果と献身を持ってなされるには安定が必要。短期間での選挙は刺激を与えるものではない。アルマーヌの言及する事件は短期間の選挙でも起こりうる。警戒の不足と信頼しすぎから生じた」と持論を繰り返すに止まらず，次のようにサークル派にとって攻撃的な発言を行った。すなわち，「半期ごとの選挙は深刻な問題を引き起こす。とりわけ植字工に無縁な利害に関心を持つ何らかの党派が，議長を置き換えるための策動をする場合には」と。そこでコルドヴァの，「すべての役職の 1 年任期」提案が出され，サークル派は強く反論した。記名投票の結果，アルマーヌ案が14：9 で否決され，コルドヴァ案が17：6 で採択されたのである[53]。

以上，代表選挙ではサークル派が攻勢に出ているように見えるが，役員の任期に関する議論は，1886年のそれとは異なり，独立派のイニシャティブによるものであり，サークル派は明らかに受け身に立たされている。さらに，コルドヴァの「1 年案」も準備されていたと考えるのが自然であり，独立派，クーフェの思惑通りに進んだとさえ言える[54]。1887年末中央

52） Cf. T.F. N. 151.

53） Cf. ibid.

54） 地方選出中央委員であるコルドヴァは独立派と言うよりは，中間派と言うべきである。投票において，クーフェが「1 年案」に反対票を投じているこ

委選挙と1888年初頭の書籍労連中央委は，アルマーヌとクーフェ，サークル派と独立派の争いの帰趨を定めることになった。重要な手掛かりを提供する Réveil 紙の 2 つの記事を中心にさらに検討を加えよう。

まず，11月25日付 N. 91. における，編集局による選挙結果についての表明である[55]。すなわち，パリ支部での投票においてユニオニストの策動にもかかわらず，投票者の数は相対的に多く，投票結果は，植字工たちがその義務を果たしたことを示しているとし，「今回，我々は，慎重さを守り，活動家が完全に介入しない選挙を経験した。それは，どこに植字工の多数派が有るかを見ることを可能にした」と。次いで，Réveil 紙は，1888年 1 月10日付 N. 94. において，アルマーヌによる巻頭論説 Élections provincials. を掲げる。アルマーヌは，パリでの選挙に関して，編集局表明と同様，積極的宣伝を慎みながら良い結果が得られたが，地方についても同様の態度をとったところ，「独立派」を喜ばせることになったとする。彼は，「独立派」を敵と見なさざるをえないとし，「戦争の準備をしていた」とさえ言う。選挙結果がサークルにとって新しい試練ではあるとしても Réveil は将来に絶望せず，賃労働の廃止に向かって前進すると決意を述べる。

パリでの中央委員選挙について，前回の1885年末選挙においては，サークルの総会決定に基づき，Réveil 紙にサークル派候補の11人のリストが掲載され 9 人当選の結果が発表された[56]。これに対して，1887年末選挙では，編集局，アルマーヌともに，積極的運動をしなかったとするように，Réveil 紙に候補者リストは見当たらない。これが何を意味するかはともかく，サークル派の当選人数は，種々の記事から判断して，少なくとも11名中 9 名であり，「多数派」を獲得したことが確認できる[57]。問題は，地方

ともかえって事前の準備を感じさせる。

55） Cf. Re. N. 91. Les élections fédérales. La Rédaction.

56） Cf. Re. N. 41. 42. N. 43.

選の結果がサークル派によって１月７日以前に認識されていたかどうかである。アルマーヌの論説が，１月10日付できわどいが，論調からする１月７日の中央委での代表選を反映しており，そこで初めて地方選の結果を知ったように読める。とすると，サークル派は，パリでの投票結果だけをもとに，勝てると判断して代表選に臨んだことになり，それも自然な推測である。Ralliement 紙，1888年１月１日付 N. 37. Pauvre Fédération! は，地方支部による中央委選挙候補者名を提出したのは，大部分が自称「独立派」であるとしているが，まだ結果を確認しているわけではない[58)]。サークル派が，パリについては圧勝を踏まえていたとしても，地方選については中央委での代表選で事後的に確認したとすると，初めて代表選に候補を立てて闘ううえで，楽観的，さらに言えば杜撰と言わざるをえない。ここには，サークル派の組織活動の弱点が浮かび上がることになる。

すでに見てきたように，サークル派は書籍労連代表を含む全ての役員の任期を６か月とすることを一貫して主張してきた。1887年８月10日付 N. 84. は，これを理論づける編集局の論説 A nos syndics. を掲載する。相互扶助組合（代表）選挙結果を踏まえ，以下のように言う。「パリの植字工は３度にわたって Réveil の候補者にその組合の管理をゆだねた。１人

57） サークル派の当選者として Re. N. 43. から，1885年末の候補者リストと重なる Giobbé, Allemane, Paillot, d'Ochancourt, Pompilio, Lefèvre と監査委員候補 Morin を合わせて７名，1889年末選挙結果についての N. 142. から Flogny, Petit の２名，計９名を確認できる。それ以外の当選者は，Keufer と Berrée であり，後者については所属不明であり，サークル派の場合10人となる。

58） パリの選挙については，1,496人中845人，半分しか投票していないのにアルマーヌ派の機関紙はたいしたものとしているとし，委員の多くが外国人であり，労働組合法に違反していると言う。次号では，「地方選挙でサークル主義者よりもましな自称 indépentants が多数を占める」と確認している。Cf. Ra. N. 38.

に委ねるのは危険，代表の役割は，組合委員会によって決定された手段の執行に限定されるべき。古い管理のやり方を改めて，新しいそれに代えるべき。全ての委員がその委任を果たせるような管理組織の研究に直ちに取り掛かるべき」と。これと符合するように，様々な組織における監視委員会 Comité de vigilance を提案し，組織する。すなわち，労働党市会議員団を監視する委員会，労働審判所委員を監視する委員会，労働取引所代表監視委員会など[59]。また，規約によるとサークル内においては役員を 4 半期ごとに改選することになっている[60]。ここには，サークル派，アルマーヌ主義の根本原理とも言うべき反権威主義が貫いている。この原理の評価はおくとして[61]，書籍労連においては，次のことにつながった。まず，「代表」の役割の軽視である。すでに見てきたように，中央委の議論においては，サークル派はいつも多数を占めており，6 か月任期さえ維持していれば，あえて，代表をサークル員にするまでもないと判断していたと考えられる。いま 1 つは，クーフェ，独立派の軽視である。結果から見れば，クーフェは，一貫して代表の地位を堅持し，中央委選出方法の変更など，着々と手を打ち，6 か月任期制を覆すことにも成功している。サークル派，アルマーヌは，このようなクーフェにまったく無警戒であったように見えるのである。

1887年末の中央委選挙と，それを受けた1888年初頭の代表選挙，代表任

59） Cf. Re. N. 81, N. 82.

60） 役員として書記，書記補，会計が挙げられている。Cf. Re. N. 101.

61） ある種の理想論のように見え，そのような評価もある。しかし，現実的に見ると，このような監視委員会や，また役員の権威を制限することが，アルマーヌの影響力を発揮し，維持することにつながった可能性を否定できない。書籍労連中央委においても，アルマーヌは，クーフェと並んで代表的な役割を果たしているが，自ら代表になろうとはせず，また，クーフェに対抗できる候補も養成していない。1886年11月に，ナンバー 2 とも言うべきパルロが急逝したことが，サークル派にとって痛手であったとしても。

期１年化は，サークル派に抗して労連中央委におけるクーフェの地位を確立した。しかしながら，アルマーヌが書籍労連を離れるのは，1889年になってからであり，サークル派が影響力を決定的に失うのも，1889年末中央委選挙によってであった。簡単に，1888年の状況を確認しておこう。労連機関紙によると，クーフェが，２月アルジェ，５月ナンシー，10月サントルに紛争解決と組織化のために代表として派遣され，また，年末にロンドン国際労働者大会に派遣されている[62]のに対して，アルマーヌは，４月にヴェルサイユで講演し，６月サン・テティエンヌ，リヨン，９月リモージュ，ニオールに中央委代表として派遣されている[63]。クーフェの比重が大きくなっていることは間違いないとしても，この年は，アルマーヌがパルティ・ウーブリエ紙を発刊して，反ブーランジスムの先頭に立っており，その間にも書籍労連の顔としての役割を果たしていることは確認されねばならない。また，年末の労働審判所委員の選挙にあたっては，サークル派の幹部パイヨがパリ組合，書籍労連の推薦を受け，ユニオニストの推薦候補を破って当選し，アルマーヌはこの運動でも中心的役割を果たしている[64]。

Réveil 紙では，すでに指摘したように，1888年１月10日付 N. 94.，１月25日付 N. 95. が連続して，E.V. 名で，J. フェリー下院議員襲撃事件についてのポジティヴィストの手紙に関わって，クーフェ批判を掲載した。「中央委選挙の前に公表されていれば，687票の 2/3 を減らしたであろう」と，厳しい言葉が使われたが，それ以上の展開はなかった[65]。その後も，パリ

62） Cf. T.F. N. 156, 160, 171, 173.

63） Cf. T.F. N. 159, 162, 169. ニオール派遣は，リモージュにいたアルマーヌに紛争解決が依頼されたもの。

64） Cf. T.F. N. 167, 168, 173.

65） 年末のロンドン大会におけるクーフェの行動への批判がなされたが，対立をあおる性格のものではなかった。Cf. Re. N. 118.

組合での新規加入の増大，パイヨの労働審判所委員の当選など，ユニオニストとの闘争の記事が見落とせない[66]。事実上は独立派との共闘が維持されたのである。

第3節　Réveil紙とJ.アルマーヌ

アルマーヌの書籍労連からの離脱は，直接にはサークル派内の対立から生じた。アルマーヌとサークル，Réveil紙との関係を検討し，そのうえで，事件そのものを考察しよう。Réveil紙は，フランス労働党に所属する社会研究植字工サークルCercle typographique d'Études sociales の機関紙である。しかし，このサークルがいかなる組織であったのかは，これまでまったく明らかにされていない。我々は，すでにその基本路線について検討した。ここでは，断片的ながら，Réveil紙から得られる手掛かりをもとに，サークルの会合，組織員，機関紙読者等を通じて，その組織としての実態を再構成したい。Réveil 紙1888年4月25日付N. 101. は，社会研究植字工サークル，規約，原理の宣言を掲載している[67]。この規約は，書記，書記補，会計の4半期ごとの改選を定めているにもかかわらず，彼らが構成するはずである役員会の規定は見当たらず，それらしきものを載せているRéveil. N. 54. を例外として，役員会についての記載も見出せない[68]。上記規約には，総会の規定はなく，散見される「総会報告」中に，「アルマー

66）　Cf. Re. N. 96, 100, 117.

67）　Cf. Re. Cercle Typographique d'Étude sociales. status, déclaration de principals. この時期に，あらためて規約や，主要宣言が掲げられた理由は不明である。初期のRéveil紙に掲載されていた可能性はあるが，我々が規約を見出すのはこの号のみである。

68）　5月5日のséanceで，5月19日総会を決定し，議題を定めたとある。ここからすると，このséance（会議）は，役員会であるということになる。Cf.Re. N. 54.　それ以外には同種記述を見出せない。

表５　サークル総会概要

N. 24.	1885年１月18日	パリ組合役員選挙候補者の決定 次のパリ組合総会での議論のために amnistie についてアルマーヌによる方針説明
N. 41.	1885年10月25日	労連中央委選挙候補者決定，労働審判所委員選挙
N. 45.	1886年１月３日	パリ組合委候補者決定
N. 55.	1886年５月19日	労働党の集会 Congrés fédérative du Centre にかんして
N. 56.	1886年６月16日	上記総会に関する準備報告，参加者決定
N. 72.	1887年２月６日	印刷所を公的部門にすることが植字工にとって有用とのアルマーヌの講演 ヴィユイによる財政報告
N. 81.	1887年６月５日	労働党監視委員会設立に関する議論　アルマーヌ案採択 第２議題　アルジェリア各地でのアルマーヌの活動とその成果
N. 83.	1887年７月17日	労働党地方集会代表にアルマーヌら３人の選出
N. 86.	1887年９月４日	労働審判所委員による監視委員会への報告　アルマーヌ　労働党大会報告
N. 110.	1888年９月２日	規約　グループを形成する最少人数　アルマーヌ案採択
N. 115.	1888年11月25日	ヴィユイが週１回の集会を提案　アルマーヌの議論に従って，月２回を決定

ヌが毎月開催を要求した」[69]，「アルマーヌの意見に従って月２回に決定した」[70]との記述が見られるだけである。上記役員の４半期ごとの改選規定とあわせても，月１回程度，定期的に総会を開いていたはずではあるが，Réveil 紙上での掲載は，極めて不定期であり，内容も不統一である[71]。

69）　Re. N. 72. 1887年２月６日総会。

70）　Re. N. 115. 1888年11月25日総会。

71）　労連機関紙は，中央委員会については，必ず，漏らさず議事録概要を掲載している。若干の変容はあるとしてもほぼ統一された形式でなされており，

1885年から1888年にかけて4年間で計11回の「総会報告」が掲載されており，その概要を表5に整理しておく。

上記規約は，週20サンチームの会費を規定している。しかし，サークルが労働党に所属し，権力との関係で公表することを憚ったのか，会員数についての記述をRéveil紙上に見出すことはできない。構成員についての情報として，最も重要なものとして，書籍労連中央委員会委員候補者リスト，パリ組合委員候補者リストを取り上げる。1885年1月から1887年1月について表6に整理する。それ以降1887年から1888年にかけて若干の変化はあるがほぼ同様であり，省略する。パリ組合委員候補者とパリ支部選出労連中央委委員候補者は重なりがなく中核的な構成員として，パリに25人余りと見ることができる。N. 44. の地方支部選出書籍労連中央委員会委員候補者リストは，パリ外へのサークルの広がりを確認できる唯一のものである。詳細は不明であり，サークル員が各地に1人ずつとは考えにくいが，最少14人である。これ以外に，Réveil. N. 48. はパリ組合コントロール委員会委員候補者リストとして，ベルナール，フロニー，パルロを含む50人を掲げており，この3人を含むこれまで名前の挙がったものを除くと40人となる[72)]。N. 72. は1887年2月6日のサークル総会に50人が参加したと

機関紙を通じた組織運営の方針が明瞭である。これと比較すると，サークル―Réveilは，その程度が低い。もちろん，労連が地方組織の統合を課題としており，サークルは地方にも構成員がいるとしても，パリを中心とし，直接的な意思疎通の可能な組織であったことも，両者の性格の違いをもたらしていると考えられる。相良匡俊によれば，当時，労働運動においてはなお，直接的な人間関係が支配的であり，理論・出版物を通じた組織が重要性を増すのは世紀転換期である。その点では，労連機関紙やRéveil紙，さらにRalliement紙は先駆的なものであった。『社会運動の人々―転換期パリを生きる』2014年参照。

72） パルロ，ヴィユイは，上記地方支部選出書籍労連中央委員会委員候補者リストにも名前が挙がっている。1885年10月から1886年2月に職場を変わった

表 6　書籍労連中央委員会委員候補者リスト，パリ組合委員候補者リスト

N. 23.	パリ組合委員候補者リスト	Flogny, Labarriere 他11人
N. 31.	パリ組合委員候補者リスト	Flogny, Labarriere, Parlot 他15人
N. 41.	書籍労連中央委員会委員候補者リスト（パリ組合選出）	Allemane, Giobbé 他11人
N. 44.	書籍労連中央委員会委員候補者リスト（地方支部選出）	Henschel, Parlot, Vieuille 他14人[注)]
N. 58.	パリ組合委員候補者リスト	Bernard, Flogny 他15人
N. 70.	パリ組合委員候補者リスト	Bernard, Flogny 他15人

注）この時には，他にシンパ候補 1 名を推薦している。

する。Réveil 紙創刊号によると約20人のメンバーがいたとされ，1885年末には，サークルはその勢力を確実に伸ばし，それ以降も少なくとも維持していたのである。同じく創刊号によると，「1883年12月23日のサークルの会合に200人の組合員が参加した」とあり，また，すでに指摘したように，Ralliement 紙 N. 41. 1888年 5 月 1 日付は，「パリ組合に200人のサークル主義者がいる」との独立派のボリーの発言を紹介している。Réveil. N. 88., N. 100. はそれぞれ，1887年 9 月末，1888年 3 月末の機関紙の状況を報告しており，読者数について手掛かりが得られる。販売合計額が300フラン余りであり，3 か月 1 フランから推測すると300人となり，もとより厳密ではないが，200人から300人あたりがサークルの影響力の下にあったことを推測させる。

サークル設立の経過は不明ながら，アルマーヌの主導性は創刊号に明らかである[73)]。サークルのそれ以降の運営から彼の位置，役割を検討しよう。すでに見たように，サークルは，権威主義を排し，特定の個人による支配

とも考えられず，厳密なものとして扱うことはできない。

73）Cf. Re. N. 1. Ralliement 紙には，「（アルマーヌ）は宣伝のためにサークルを結成した」との記述が見られる。Cf. Ra. N. 24.

を否定していた。規約が役員の頻繁な交代を定めており，総会では，その都度，議長と書記を選出した。Réveil 紙から役員の構成を知ることはできないが，アルマーヌが何らかの役職に就いていた徴候は全く見当たらない。とはいえ，表 5 に一部を示したように，総会におけるアルマーヌの影響力は総会報告からも十分読みとれる。彼の発言が大きく取り上げられ，また，彼による問題の裁定が目立つ。書籍労連全国大会代表や，労働党各種集会への代表にも率先して選出されている[74)]。書籍労連パリ選出中央委候補としては1885年末と1887年末にリストに載り，それぞれ 2 位，3 位とサークル候補ではトップで当選している。労連中央委での代表クーフェと並ぶ活動がサークル内での影響力を維持し強めたことは言うまでもない。それだけではない，サークル内に 1 種の序列が存在したことも見てとれる。A. パルロが1886年に急逝するまで，No. 2の位置を占めていたことは各種記事から明瞭である。E. ヴュイユや，ラバリエルも特別視されていた[75)]。また，表 6 に示されるように，各種委員候補者リストにおいて，候補者がほぼ固定していたことは，彼らと一般サークル員との違いを示すものである。公式見解は別として，サークル内に幹部集団が形成され，アルマーヌがその頂点にあって，事実上のサークル代表であり続けたことは否定しがたい[76),77)]。

74） Cf. Re. N. 83., N. 56.

75） Ralliement 紙には次のような表現が見られる。「取り巻きを連れたパルロ」Ra. N. 17.,「主人 Maître は欠席。……代わりに副官ラバリエルが演壇を占拠」Ra. N. 41. など。

76） Ralliement 紙は，「御主人とその僕」,「主人」,「独裁者」などの表現によって，サークルがアルマーヌのものであることを当然視している。Cf. Ra. N. 14, N. 41, N. 49.

77） このように言うことは，今日の目から過去を断罪しようとするものではない。ある種の「理想」が掲げられ，人々を動かしたことは認められるべきである。しかし，今日に生かす可能性を探るうえでも，事実は押さえられねば

Réveil 紙におけるアルマーヌの位置，影響力を検討しよう。まず，アルマーヌは公式に Réveil 紙の編集責任者であった。1884年 2 月25日の創刊から1888年 1 月10日 N. 94.まで，表題 LE RÉVEIL TYPOGRAPHIQUE ORGANE DU CERCLE D'ÉTUDES SOCIALES の下に，経営に関しては MAYNIER-MICHELLAND に問い合わせ，編集に関しては，J. ALLEMANE に問い合わせ，とされていた。N. 95. から1888年末 N. 117. まで，MAYNIER-MICHELLAND の名前がなくなり住所のみになるが，アルマーヌについては変更なし。1889年初頭 N. 118. からは，経営者 E. VIEUILLE，編集代表 J. ALLEMANE となり， 2 人が解任される1889年11月25日付 N. 139. まで続く。なお，新聞末尾には，印刷責任者 A. LABARRIÈRE と記される[78]。この N. 139. における編集局の説明の冒頭では，次のように言われる。「Réveil の創設以来，我々の仲間アルマーヌが大きな役割を果たしてきた」，さらには，「アルマーヌ，メイニエ－ミシュラン，ラバリエル，ヴィユイ等がこの新聞の経営と編集を体現している」と[79]。解任の説明文であることに留意しなければならないとしても，アルマーヌが形式的のみならず，実質的に Réveil 紙を編集していたと言ってよい。

Réveil 紙の紙面から，この編集の具体的な内容を見よう。アルマーヌは，多くの号に J.A. 名で[80]巻頭論説，あるいは巻頭言と言うべきものを載せている。1885−1889年についてその回数を見ると表 7 の通りである。1885年は年24号中15回，1886年は14回を占め，1887年には 9 回と減少するが，

ならない。

78） 厳密には創刊号から1889年 2 月10日付 N. 143. まで。それ以降は，L. FLOGNY となり，さらに，Imprimerie du prolétariat J. ALLEMANE が付け加えられる。

79） Cf. Re. N. 139.

80） 唯一 N. 86. では，J. Allemane 署名である。また，厳密に巻頭ではないが，実質的にそう見なせるものを含む。

表７　Réveil 紙におけるアルマーヌの巻頭論説

1885年	15回
1886年	14回
1887年	９回
1888年	７回
1889年	６回

アルマーヌ以外の巻頭論説の筆者は分散しており，２番手の書き手と言うものは見当たらない[81)]。サークル組織の検討において示したように，編集者 Rédaction 名で，各種選挙候補者，選挙結果が冒頭に来ることを除くと，サークル総会，役員会での議論ではなく，アルマーヌの論説が巻頭を飾ることは，Réveil 紙の大きな特徴である。さらに，多くの場合，アルマーヌの論説は，当面の運動に無関係とは言えないとしても，具体的な運動方針を示すよりも，煽動，檄と言うべきものがほとんどであることは創刊以来変わらない。1887年について表題と概要を示した表８からも確認することができる[82)]。アルマーヌの巻頭論説は，1888年には７回とさらに減り[83)]，２月末から９月末まで空白となる。その間に O'Naimar 名の巻頭論説が６回を数えるが，O'Naimar は，パリ組合委員候補リストにも見られず，サ

81）　1887年について見ると，J. M.-M. 署名の３つの巻頭論説が見られる。これは，上記メイニエ－ミシュランであると考えられるので，彼の役割の大きさを確認できる。

82）　1886年について見ると，N. 64. Une équipe de travail. は l'Officiel 事件に関して，歴史的に解明したもので，闘争方針ともかかわり，具体的な説明を与え，珍しい。また，N. 52. L'École de Montevain. は，孤児の初等教育について具体的に論じ，アルマーヌの一面を示すものとして興味深いが，運動の方針とは無関係である。

83）　２月の N. 96., N. 97. において，パリ組合主催の植字工集会の成功によって，分裂に終止符が打たれるであろうと，楽観的見通しが述べられるのが注目される。

表８　アルマーヌの巻頭論説の表題（1887年）と概要

N. 72.	Un krach typographique.	L'Association de l'Officiel のスキャンダル
N. 73.	La Diane.	衛生委員会，Bourse du Travail 関連
N. 74.	La Dénouement.	相互扶助組合の困難にかかわって，Alary 批判
N. 79.	L'Imprimerie Nationale.	民間印刷業者からの非効率，高価との非難への反論
N. 81.	Exposition international.	全支部が市当局，県当局に働きかけ，補助金獲得を目指す
N. 82.	Bourse du Travail.	書籍労連が，組合員，非組合員全体の代表選出のイニシャティブ
N. 86.	Le Congrès fédéral.	次の大会の１つの課題　協同組合主義者批判　市議会，県会の重要性
N. 87.	Le Congrès fédèral.	75支部の参加で成功　女性労働者問題での課題
N. 93.	Le syndicat de la presse.	ジャーナリストの特権的組合結成の動き印刷工との連帯の必要性

ークル内での位置は不明であり，他に，編集のあり方が変化した徴候はない。この時期，反ブーランジスムの闘争，それとかかわって，立法議会，市議会選挙，パルティ・ウーブリエ紙の創刊とアルマーヌは多忙を極めていたことが，巻頭論説を減少させたのであろう。アルマーヌ解任以前には編集委員会は存在せず，編集のあり方についての記述も見出せない。巻頭論説以外の論説の著者[84]，内容から特別な傾向を見出すことはできず，どのような選別がなされていたのかは不明である。ここでは，巻頭論説についての検討から Réveil 紙が一貫してアルマーヌ個人を中心とした新聞であったことを確認するにとどめる。

Réveil 紙 N. 129. N. 139. は，アルマーヌによる印刷所設立とそれをめぐ

84）　著者については，イニシャルのみの場合が多い。著者名が分かるとしても，どのような人物かの情報はごく少ない。

る対立，最終的にアルマーヌのサークルおよび書籍労連からの退場にかかわる公式の，決定的な資料である。さらに1889年の Réveil 紙には，この背景を考察する手掛かりを見出すことができる。アルマーヌが Réveil 編集責任者をやめることを知らせる11月25日付 N. 139. から検討しよう。

この号から，Réveil 紙表題下の経営者，編集者名が表 9 のように変更される。編集代表 J. アルマーヌが 8 名の編集委員会に，経営者 E. ヴュイユが 5 名の経営委員会に置き換えられていることを確認できる。

冒頭，編集局から読者あてに，以下の説明が与えられる。「Réveil は，かつて，現在，将来，植字工サークルの機関紙であり，集団の新聞であり，何らかの個人のものでないことは疑いもなかった。アルマーヌとヴュイユがそれぞれ，タイトルの下に，代表編集者，管理責任者として現れるのを理解したのはそのようなことであり，彼らは，今後，名誉の感情に動かされ，目立たないように振舞い，一兵卒にとどまる」と。すなわち，言葉は選ばれてはいるが，アルマーヌとヴュイユの編集責任者，経営責任者からの解任である。それが，サークルと Réveil 紙の組織原理である特定の個人の権威の否定，集団的運営によって裏づけられている。今後は，「サークルのメンバーから，２つの委員会，編集委員会と経営委員会が選

表 9　Réveil 紙の経営者，編集者名の変更

旧	Administrateur : E. Viuille, 169, Rue Saint-Jacques, 169, Paris
	REDACTEUR-DELEGUE :
	J.ALLMANE
	14, Rue de la Fontaine-au Roi, 14 Paris
新	COMITÉ DE RÉDACTION
	J. ALLMANE, V. BRETON, L. FLOGNY, L. MARIANO, J. MAYNIER-MICHELLAND
	E. MORIN, L. ROLAND, P. TRAPP
	COMITÉ D'ADMINISTRATION
	A. AUJARD, A. HAMELIN, HUBIN, L. PETIT, E. VIEUILLE

出され，……フロニーが両委員会の書記に指名された」として，名実ともに集団主義が謳われるのである。激しい対立があったことは，「ヴュイユとアルマーヌが，彼らの抵抗にもかかわらず，編集，経営委員会のメンバーに入れられたのは，サークルのメンバーとしてでしかない」，に明らかである。対立の原因は，アルマーヌとヴュイユによる印刷所設立であった。すなわち，「こうして，悪意で，Réveil 紙は，プロレタリア印刷所の経営者であるアルマーヌの新聞であるとほのめかすことは不可能になった」と。

Réveil 紙 N. 129. は，植字工サークルによる中央連盟（l'Union fédérative du Centre）[85] メンバーへの労働党印刷所に関する報告を掲載している。要点は以下の通りである。まず，印刷所設立の経過が述べられる。アルマールら 3 人のイニシャティブによって，Réveil 紙の助力も得て，Prolétariat と Réveil だけを印刷する印刷所が設立されたこと。設立されるや否や大きな反響を呼び，10の新聞や，その他の印刷の仕事が来たこと。これに対応するために，アルマーヌらは，J. Allemane, Desforges et Vieuille 名の会社を設立したこと。これに対して，印刷所が党に属するのか，3 人が association ouvrier の見せかけの下パトロンになろうとしているのではないかとの疑いが生じたこと[86), 87)]，である。次いで，この疑いを晴らすため

85） 同連盟は，植字工サークルが属するパリ地方の労働党組織。この印刷所設立は労働党にかかわる問題であったが，植字工サークルの果たす役割の大きさが注目される。買い取り委員会も，植字工サークルの 8 名の特別委員会に，中央連盟 l'Union fédérative du Centre の16名を加えるというものであった。

86） パリ組合分裂の直接の原因となった L'Officiel 事件が，経営を認められた労働者が，経営者の地位に固執するという同様の内容を持ち，サークルが強く批判していたことも影響したと考えられる。

87） 印刷所設立の正確な日時は不明ではあるが，すでに，Réveil 紙 5 月10日付 N. 126. Nouveau Schisme. において，アルマーヌ印刷所に対する批判が生じ

に，植字工サークルが，特別委員会を設置し，中央連盟への報告を作成することになり，以下の提案が決定されたことである。すなわち，3人は，「20％は設立者3人に，40％は協力者に」を含む利益分配を考えているが，これは決して認められず[88]，中央連盟内に，この会社の買い取り委員会を設置し，買い取りを実施するというものであった。

植字工サークルの特別総会がもたれ，そこで，問題を検討するための特別委員会が設置されたとあるが，この総会を含め，それ以降の経過がRéveil紙上に掲載されることはなかった。それ自体が，アルマーヌらとサークルの対立の深さを示しており，ことの性格上，やむをえなかったと考えられる。しかし，この報告が掲載されて以降，アルマーヌらの事実上のRéveil紙からの追放までの，約3か月間の経過も不明である。さらに，買い取り委員会設置の提案にもかかわらず，アルマーヌの印刷所は継続し，Réveil紙の印刷もそこでなされており，買い取りは実施されなかったと考えられる。激しい駆け引き，妥協があったと想像する以外ない。

印刷所設立に伴う会社設立が，当初からアルマーヌの予定であったのか，報告が言うように，想定外の反響から生じたのかは別として，これが，アルマーヌのRéveil紙とサークルからの離脱の主要な原因になったことは，以上の検討が示すとおりである。しかし，Réveil紙N. 139.における編集局報告，N. 135.上の論説には，編集の内容そのもの，あるいは

ていることを指摘できる。なお，同論説は，「Association ouvrier de la rue Saint-Sauveurが植字工サークルの庇護のもとで形成されたことを認めるなら，それはサークルが与えた組織である。労働党はそれを利用するとともに，支えねばならない」と，印刷所が，サークル，労働党に属すべきことを主張している。

88）「我々は原理からして，利益参加に絶対的に反対であり，本当の分配は，労働者に1日の労働のすべてを支払うことにあると考える」とする。労働党の原理に関わるものと考えられた。

運動の方向にもかかわる，対立とは言えないまでも，見解の相違についての手掛かりを見出すことができる。N. 139. における編集局報告の後半では，Réveil の今後について次のように言う。すなわち，Réveil 紙を「専ら植字工の機関紙にする」とし，「一般的政治経済，社会経済を扱う代わりに，我々は印刷業に直接かかわる社会政策に特化しようとする」と。さらに，「敵対者とも真剣に議論する用意があり」，「基本的礼儀をわきまえず，辛辣な個人攻撃に置き換えることが主要問題である不毛な批判を避けるつもりである」，「議論するが，決して張り合わない」と。アルマーヌが直接名指しされているわけではないとしても，アルマーヌ主導の紙面のあり方への批判と見るべきである[89)]。これと関連して，N. 135. 上の論説には，「あちこちから，Réveil 紙が当初描かれていた道からそれているとの苦情。まず，激しい批判のやり方をやめたこと。それは，それを用いる人が正しくとも信用を無くするから。第 2 に博覧会 Exposition のためそれに言及せざるをえなかったから」，との注目すべき叙述が見出される。したがって，Réveil 紙の編集，とくに「激しい批判」をめぐって，すでに，対立があったことが明らかである[90), 91), 92)]。

89） 次のようにも言われる。すなわち，「我々は宮廷人になろうとするのではないが，次から次への反撃で下賤に身を落とすつもりもない。ギャラリーを喜ばせることは不要であると信ずる。……我々に投げつけられる，挑発と侮蔑を取り違えない」と。アルマーヌ流の激しい言葉遣いが批判されている。

90） なお，対立組織のしかも創作ではあるが，Ralliement 紙1889年10月12日付 N. 58. の Lettre du citoyen Coupe-à-tout. では，次のようなことが言われる。Réveil 紙の書き方が変更されており，気に入らない。前のやり方に戻るべき。サークルはなお不振であり，Jean（アルマーヌ）が戻ってくれば直るはずであり，それを期待すると。Réveil 紙の編集の変化，アルマーヌがサークルを離れていることが指摘される。Ra. N. 54. の Lettre du citoyen Coupe-à-tout. にも，同種の記述が見られる。

91） 4 月25日付 N. 125. において「植字工総会が，Parti ouvrier 紙を扱う報告上の 1 行について， 2 時間もの無駄な時間を浪費。盲目で，嫉妬深い党派精

1884年２月25日創刊の Le Réveil Typographiqe は，1883年設立のサークルとともに，アルマーヌを，それまで以上に，植字工組合にかかわらせた。1888年に Parti Ouvrier を創刊し[93]，労働党の活動家としてより大きな役割を果たすことになるとしても，Réveil 紙からの退場によって，アルマーヌは労働組合運動から離れることになる。それは，アルマーヌにとっての転換点であるとともに，A. クーフェ主導によるパリ植字工組合の再統一に道を開き，フランス書籍労連における彼の指導権を最終的に確立したものであった。

おわりに

1880年に流刑から戻り，フランス労働党に参加して以来，党の大物であり，1888年反ブーランジェ運動の先頭に立ち，1890年の労働党分裂を経

神が，我々の組織における議論を支配していることの現れ」と，サークル派が指導するパリ植字工総会でアルマーヌ批判が公然となされていることが示される。

92） N. 139. 編集局報告は，「Réveil は……何度となく財政的困難に陥り，最近はほとんどいつもであった」，「特別な事情がアルマーヌとヴュイユに，現状を変えることを要求させた」として，アルマーヌによる印刷所設立のきっかけの１つが財政的困難であったことを指摘する。これとかかわる，Réveil 紙編集の変化が見落とせない。1889年初頭 N. 118. から，それまでの，３欄４ページから４欄４ページに変更され，雑報，詩，文芸欄が設けられ，さらに，N. 122. から広告欄が大きくなり，とくに N. 133. 以降は，４ページ目が全面広告欄となる。これが，編集方針をめぐる対立の１要因であった可能性を指摘しておく。

93） なお検討すべき点はあるとしても，Réveil 紙の経験が，パルティ・ウーブリエの発刊，運営に大きな影響を与えたことは言うまでもない。パリティ・ウーブリエの編集，運営をめぐってもアルマーヌは下部の活動家たちと対立することになる。そこには，アルマーヌの独善性というべき性格が反映している。拙稿　前掲「革命的社会主義労働者党指導者 J. アルマーヌについて」参照。

て，1891年の革命的社会主義労働者党（通称アルマニスト）設立によって，当時のフランス労働運動に重きをなしたアルマーヌにとって，植字工サークルや Réveil 紙を通じた，パリ植字工組合，フランス書籍労連の活動はいかなる意味を持っていたのか。書籍労連において指導権を争った A. クーフェのそれと比較することで，考えてみよう。1888年初頭の書籍労連代表選挙は，サークル派と独立派，アルマーヌとクーフェが直接対立した唯一のものであり，この時に，もし，敗れていても，クーフェなら巻き返しを図ったと確信を持って言うことができる。後に，C.G.T. において改良派の中心的指導者となり，また，労働高等審議会委員，副議長となるクーフェにとって，フランス書籍労連こそが，すべての基礎であった。クーフェは根っからの労働組合活動家であり，それに徹した指導者であった。それと比べると，アルマーヌにとって書籍労連，植字工組合は一時的，部分的なものでしかなかったのである。